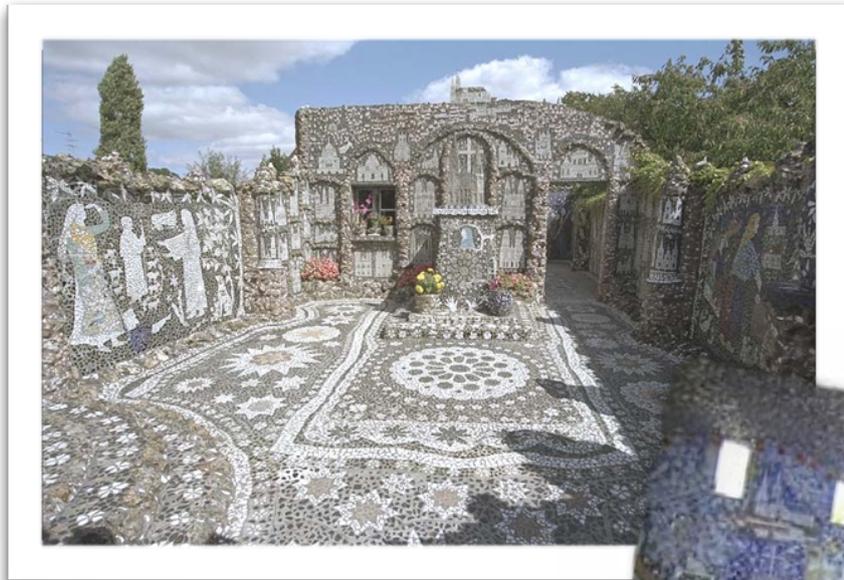


墓守の夫婦がつくったタイルの美邸

ピカシェットの家



アメリカ ロスアンゼルス



パリから車で一時間のところに、大きくて美しい大聖堂のあるシャルトルの町があります。右側がゴシック、左側がロマネスクという非対称の尖塔をもつそのノートルダム大聖堂は、世界的にも絶品と評されるステンドグラスをもち、堂々たる風格をもっていました。でも、そのシャルトルで我々をあっと驚かせ、そして魅了してくれたのは、町外れにあるピカシェットの家Maison Picassietteでした。道からバラのアーチのあるとても狭い入口に入っていくと、目の前に陶器のモザイクを張り巡らせた小さくてかわいい家が現れました。外観も部屋も庭も、花瓶もベンチも・・・全てがガラスや陶器の破片で飾られています。



この家をつくったのはレイモン・イシドールさん（1900年生まれ）墓守の仕事をしていたこのオジさんは、お墓に供えられたお花の花瓶や割れた皿を集めてはその美しさに酔いしれていました。そして1930年から、実に22年もの間、家の内外にそれらの陶器やガラスをモザイク状に張り続けていきました。それは64歳で亡くなるまで続けられ、未完成のまま、その建物は美しい姿で残されました。今では素朴派芸術として歴史的記念物に指定され、数多くの観光客に驚きと愛を与えています。



住宅を学ぶものにとって、この家はとても印象深いものでした。芸術としての高まりもなく、形態としての美しさもない・・・しかし、一人の人間をそこまで魅了しつづけたその行為というものの不可思議な力・・・凄いねー、きれいだねー、楽しいねー、かわいいねーといって、はしゃいでしまいたくなるその力・・・それは単なる興味というものを越えた、愛と呼ぶことがふさわしい、そんな芸術だと思うのです。そして、イシドールさんとその奥様の二人の生活が目浮かんで、そこにもまた愛のようなものを背景に感じたりするのでした。

